茨城県真壁郡関城町

専行寺古墳発掘調査報告書

昭和61年2月

関城町教育委員会
関城町史編さん委員会

例　　言

1)　本概要は茨城県真壁郡関城町大字上野字東郷954番地に所在する専行寺古墳の発掘調査概要である。

2)　本古墳の調査は1985年２月の発見時に応急処置を行い，正式には1985年７月27日から同年８月10日まで実施した。

3)　本調査は関城町史編さん室を中心に，文化財保護行政の面から関城町教育委員会が指導して実施した。

4)　出土遺物は調査を担当した茨城大学人文学部博物館学実習室に現在は保管されているが，町史編さん事業終了後は町に返還する予定である。

5)　出土した遺骸については，聖マリアンナ医科大学解剖学教室の森本岩太郎博士に依頼して，形質人類学的調査を実施していただいた。

6)　石棺内の赤色顔料および白色泥状物等の分析については，武庫川女子大学安田博幸教授に依頼した。結果については後日，報告したい。

7)　写真は森本岩太郎博士および関城町史編さん室の新井薫・栗原政彦が撮影したものである。

序　　文

当町は，船玉古墳や上野古墳に代表されるように関本地域を中心に非常に多くの古墳が確認されています。それだけに，当地方は古くから生活文化がひらけていたことを意味しています。

今般発掘された専行寺古墳は，町史編さん事業の一環として実施された遺跡分布調査の過程でたまたま発見された，いわば全く“無名”の古墳でありました。発掘調査は終始慎重にすすめられ，遺骸をはじめ直刀・刀子などいくつかの副葬品を無事収集できましたことは，今後の研究に大きな史料となることでしょう。

発掘初日，蓋石が除去され同時に数体の遺骸が確認されたときは千数百年前の古代人との無言の出会いに大きな感動を覚えたものでした。そして，これら古代人の遺骸は斯界の権威，聖マリアンナ医科大学教授森本岩太郎博士の手により科学的に分析・鑑定をいただけたことは本町としまして誠に幸運なことでありました。そしてこの遺骸は地元，上野集落の皆さんの手で同古墳に再埋葬されることになっておりますが，この点でも森本先生には終始あたたかいご配慮をいただきましたこと，厚くお礼申し上げる次第です。

本調査が順調にすすめられ，無事完了することができましたことは，多くの関係者のご理解とご協力の賜にほかありません。特に，発見から発掘完了まで終始一貫，厳寒と炎天下の現場でその調査実務にあたられた，茨城大学茂木雅博助教授はじめ，茨大史学教室学生諸氏の献身的なご尽力には地元の皆さんも驚嘆された程で，筆舌には尽くせません。

さらに，上野集落区長関四郎・栗原清・小林武夫氏はじめ，地元の皆さんには陰に陽に多大のご協力とご援助をいただき，そしてこの間，県文化課・県西教育事務所の適切なご指示，ご指導があったことを特に記しておきたいと思います。

今後は，調査にもご参加いただいた地元の皆さん・町文化財保護委員・町史編さん委員各位の協力を得ながら，その保存活用に心してまいりたく存じております。

最後に，今次調査に関係された皆さんに重ねてお礼と感謝を申しあげます。

昭和６１年２月

関城町教育委員会

教育長　岩　崎　三　郎

目　　次

序　　文
例　　言
1. はじめに …… 1
2. 調査概要 …… 2
3. 出土遺物について …… 4
4. 出土人骨について …… 6
5. まとめ …… 11
調査参加者 …… 12

附図　1. 専行寺古墳実測図
2. 箱式石棺蓋石実測図
3. 箱式石棺内遺骸出土状況
(1) 石棺内遺骸上面実測図
(2) 石棺内遺骸下面実測図
4. 箱式石棺実測図
(1) 箱式石棺実測図
(2)・北壁実測図
(3) 東壁実測図
(4) 西壁実測図
5. 副葬品実測図
6. 出土埴輪拓影
7. 箱式石棺内における人骨の出土状況

1. はじめに

1985年から茨城大学史学教室は，関城町史編さん室の要請によって，町内遺跡の分布調査を実施して来た。

調査は三次にわたり，第一次を関本地区に選定し，1985年2月14日から同年2月20日までとした。これから紹介しようとする専行寺古墳は，こうした調査の中で偶然発見されたものである。古墳の所在する上野東郷地区は，関城町の西南端にあって，下妻市と接している。

現在は整地されて公園と化し，僅かに大日如来座像を安置する小さな堂宇が南面して存在するのみである。しかしかつては専行寺という大きな堂宇が存し，行屋として利用されたという。

近年まで荒れるにまかせており，地区の人々もあまり近よらなかったというが数年前に整地し，桜を植樹して公園化をはかったという。

編さん室の簗建司氏が整地前にこの附近で土器片を採集したことがあったというので，1985年2月18日に簗氏の同行を得て奈良裕基君と現地を踏査した。その結果桑畑で数片の円筒埴輪を採集することが出来た。この附近では茶焙山古墳まで円筒埴輪を樹立した古墳は存在せず，しかも地形的に観察しても古墳が存在したとは思われない形状であったため，私達は埴輪窯の存在を想定して，水田に面する傾斜面を丹念に観察したがそれらしい痕跡を発見することは出来なかった。

そこで次に墳丘が削平されてしまったのではとその痕跡を追究した結果，削平されて水平と化した地表面に僅かに板石の存在を確認した。最初は板石片であろうと附近の棒切れでバラスを混えた表面を追求した結果，何枚かの板石の存在が想定されたために，近隣の栗原照夫氏宅より箒を借用して清掃した所，3枚の板石があらわれた。

私は既に1m以上も削り取られて，整地された附近の状況から箱式石棺の床石が残された可能性も考えられたので，とりあえず，現状で図化した所，僅かに継ぎ目の目張りに使用した白色粘土が確認された。そこで町教育委員会を通じて県文化課の指示をあおぎ，応急に図だけを取り，発掘調査は改めて実施することにした。

蓋石を除去すると，目張りの除去された後の浸水によって既に数体の遺骸は崩

壊寸前の状態であった。その状況を図示し，石棺を実測して，埋め戻して応急処理を終了した。

発掘調査は同年７月27日から石棺の周囲の調査と，周隍の存否による墳丘の確認を目的として８月10日まで実施した。

2. 調　査　概　要

(1) 墳丘の形態（第１図）

墳丘の調査は，かなりの制約の中で行われた。第１図に示す通り，現状において地形が改変されており，周隍の存在さえ不可能ではないかと思われた。そこで石棺を中心に南北30m，幅２mの第１トレンチを設定した所，北端で85cm 程落ち込んだ周隍を確認したが，その北は町道のため，その立ちあがりを確認するに至らなかった。

これに対して南側では，北側とは全く異なる落ち込みが確認され，少量の円筒埴輪片とともに，ビール瓶片や茶碗片さらに樹木等が混入されて検出された。

上野地区の人々の話によればこの附近は整理するまで急傾斜でゴミ捨て場であったという。その地形は北に湾入しており，現在のお堂の西側附近まで入り込んでおり，古井戸が存在したという。そのためこの附近へのトレンチ設定は断念し堂宇の東に幅１m，長さ４mの第２トレンチを設けることにした。このトレンチ北端で周隍の落ち込みを確認したが，この２地点ではあまりにも不完全であったために第１トレンチの北東部分に第１図のような拡張区を設けて周隍の落ち込みを把えることにした。

しかしこれで完全に墳丘が復原出来たとは言えない。それは第１トレンチ南側の落ち込みが人工的というよりも，自然の傾斜と思われるからである。この部分では地山面から1.3mまで下げたのであるが，底面に達せず，しかも地山の傾斜面は粘土質でかなりかたく粘着力の強い土層である。さらにその方向は埋葬施設の掘り方と逆方向で，これを周隍の切り込みとした場合は，不規則な前方後円墳を想定しなければならない。かりに南側のこの落ち込みを生かして前方後円墳とすると，次に問題となることがある。それは北側の周隍底と南側の底とでは，少なくとも2m以上の段差となることである。

こうした点を考慮すると，第１，第２トレンチで確認した弧線から直径20m程度の円墳と推定せざるを得ない。そして周隍は土浦市下郷１号墳のように谷に面した部分には認められず，墳丘の北側にのみ片面だけ掘り込んだタイプであったと思われる。

最後に埴輪の樹立については，周隍及び南側の落ち込みから40片程発見したのみであり，少量の円筒埴輪が存したものと推定したい。

(2) 埋葬施設の調査（第２～４図）

埋葬施設は墳丘の東南部にN45°Eに主軸を置く箱式石棺である。

石棺は第２図に示すように主軸長3.3m，幅約２m，深さ40cmの不整隅丸方形の土壙を掘り，その中央に長さ2.2m，幅は西側で70cm，東側で90cm，深さ20cmのほぼ長方形の落ち込みを穿ち，そこに石材を安定させて，東側に重点を置いて箱式石棺を完成させている。

石材は左右長側壁が北２枚，南１枚，前後短側壁各１枚からなり，床面３枚，蓋石３枚等計11枚の板石を使用している。床面の西側，すなわち足に当る部分の１枚石を除いて全て筑波石と称する雲母片岩である。

蓋石の継ぎ目には粘土を使用して目張りが施されていたようであるが，既に触れた通り公園造成の際に大半は削り取られ，僅かに板石の接合部分に白色粘土を確認した程度である。

石棺外側の土壙内には白色の良質粘土がかなり使用され充填され，良く密封されていた。

石棺の規模は，床面で長径1.95m，東壁45cm，西壁39cmと狭長で，蓋石に接する上面では長径1.85m，東壁44cm，西壁40cmで西側を除いてほぼ垂直である。深さはほぼ水平で45cmであり，石棺内面には赤色顔料が塗布されている。

遺骸は4～5体分と想定され，東向きで，床石より13cmまでの間につまっており，西側に床石に接するように下顎骨のみが検出された。これらの人骨は蓋石の目張りがはずされたため，漏水によって崩壊寸前であった。

副葬品は大きく三群に集中し，一番上がA号人骨に載る状態で北壁東寄りで直刀１，鉄鏃２が床面より11～13cm浮いた状態で発見された。これらはA号人骨に

載っている所からA号人骨に伴う副葬品と思われる。

次はA号人骨の下から，床面より2cm程浮いた状況でガラス小玉A群（47個）が，さらにC号人骨の下からガラス小玉B群（39個）が床面につくか1cm程浮いた状態でそれぞれ検出された。これはD号人骨を挟んで対をなしており，耳玉の可能性が強い。

最後に南壁中央よりやや北寄りに床面から1～2cm浮いて短刀1，刀子1，釣針1，鎌1，鉄鏃1等がそれぞれ検出された。これらの遺物はどの人骨に伴ったか判然としないが，D号人骨の可能性が強い。なおこれ以外に蓋石東端の北西コーナー部分に小形の下げ砥石1点が棺外副葬品として検出された。

3. 出土遺物について

(1) 直刀1 （第5図1，2）

全長52cm，刃渡り40cm，茎12cmを有し，全体に木質が附着している。峰の厚さ1cm，幅3cmの直刀で両関式である。関部に幅1.8cmの鋤金具を有し，径7.5cm×6.5cmの無窓倒卵形の鐔をつけている。全体的に錆化しており，特に先端部分は両面に錆瘤が存在する。

(2) 短刀1 （第5図3，4）

全長30cm，刃渡り22.5cm，茎7.5cmを有し，全体に木質が附着し，柄は鹿角装である。峰の厚さ0.7cm，幅2.5cmで両関式である。全体的に錆化しており，先端部分に大きな錆瘤が存在する。鐔は存在しない。

この鹿角刀装具は長さ7.5cm，幅2.5cmの断片で，刀の茎に木質をはめた後につけられている。その中央部分の両面に直弧文が認められる。表面上かなりいたんでおり，全体を知ることはできない。残された部分で，観察すると，柄の上下に二本の平行線をしっかりと鋭利な刃物で引き，その区画された中に4～5単位の文様が0.1mm位のきわめて細い線で描かれている。完全に図示することはできないが，伊藤玄三氏の説かれるA型に属するものと思われる。

(3) 刀子 1 （第５図５）

全長12.5cm，刃渡り8.5cm，茎４cmを有し，茎部にのみ木質が認められる。全体的に錆化している。

(4) 鎌　1 （第５図６）

長さ9.5cm，幅2.4cmの曲刃鎌である。人骨の一部が両面に附着している。刃渡り7cmと小形である。

(5) 釣針 1 （第５図７）

長さ7cm，軸の断面0.2×0.4cmの矩形を呈し，全体に錆化している。頭の部分は丸味を有し，頭から腰曲りにかけては直線をなし，鉤先部に低いかえりが存在する。先曲りから鉤先にかけてやや外反気味である。腰曲りから鉤先までは外幅2.2cmである。ふところの幅は1.5cmである。

(6) 鉄鏃 2 （第５図８，９，10）

鉄鏃は２本発見され，１本は完形品であるが，１本は茎から身にかけての破片である。

前者は尖根で有茎式であり，全長13cm，篦被ぎを有し，茎は短かく2.5cmである。全体に錆化している。後者も同様の様式と思われるが，先端部分が欠損しており不詳。

(7) ガラス小玉　86個

最大のもので径0.5cmが２個あり，0.25cmから0.2cmのものが多い。ミドリ色を呈するもの１個の他は大半がスカイブルーである。着色したものは含まれていない。

(8) 砥石 1

石棺の蓋石隅から発見されたもので二つに折れている。長さ10cmで上端2.0×2.8cm，下端2.5×3.0cmを測り，上端に径0.6cmの両方から穿孔した孔を有する。

四面ともに良く使用されている。

(9) 埴　輪（第6図）

専行寺古墳には円筒埴輪が少量存在したように思う。今回発掘調査したトレンチの中からは周隍内より全体で40片の円筒埴輪片を検出した。特に石棺南側の落ち込みに集中していた。これらは口縁部2片，基底部4片の外は全て胴部である。しかし，第6図③に紹介する破片は朝顔型円筒埴輪と思われる。

他は全て円筒埴輪片で，形象埴輪片は含まれていない。

全体的に焼成良好で，須恵質に近いものが2点程含まれている。第6図①②でも判るように口縁は大きく外反すると思われ，突帯は比較的しっかりと台形を呈している。突帯の調整は上位は丁寧に下位は雑である。スカシ孔は右から左廻転で鋭利に切り取っている。

この埴輪の特徴は基底部内面調整にみられる。第6図⑫～⑮に内面の調整痕を拓影しておいた。左から右へ斜位の削りがほどこされている。

4. 出土人骨について

聖マリアンナ医科大学教授
森　本　岩太郎

Ⅰ　はじめに

茨城県真壁郡関城町所在の専行寺古墳は6世紀末～7世紀初頭の古墳で，その箱式石棺から複数個体の人骨が出土した。調査に当たられた茨城大学茂木雅博氏および関城町役場ご当局がこの人骨を持参されたので，筆者が鑑定した。以下はその所見である。

Ⅱ　人骨の出土状況（第7図，第1表）

専行寺古墳の箱式石棺の大きさは約2×0.5m大で，石棺の長軸は南西～北東方向に走る。石棺の北東隅には一見したところ4個体分の頭蓋片が顔を石棺の中央部に向けるように並列し，それぞれ多くの遊離歯を伴っている。石棺の南西端

にも１個体分の歯が並んでいる。石棺の中央部には長骨を主とする大小の骨片が集中的に存在するが，これらの長骨の長軸は石棺の長軸におおむね平行している。人骨の保存状態は不良で，欠損部も多く，狭い石棺内に複数個体が納められているので，頭蓋以外の長骨などの人骨片の個体識別はほとんど不可能である。

取り上げた人骨片のうち，主要な四肢骨片について左右別にその個体数を示したのが第１表である。これによれば，最大の個体数を示すのは左側の大腿骨

第１表　主要四肢骨の左右別個体数

骨の名称	左	右	不詳	骨の名称	左	右	不詳
肩甲骨	0	1	0	寛骨	3	3	0
鎖骨	0	1	0	大腿骨	5	3	2
上腕骨	1	3	0	脛骨	2	3	0
橈骨	3	1	0	腓骨	0	1	0
尺骨	2	0	0				

で，その数は５体分である。したがって，大腿骨によれば石棺内の人骨は少くとも５個体分は存在することになる。左右の大腿骨について性別をみると，左大腿骨は男１・女１・性別不詳３，右大腿骨は男２・女１である。そこで５体の内訳は男が２体，女が１体，性別不詳が２体となる。

いっぽう，頭蓋とともに出土した歯を整理してみると，全部で７個体分があり，男４・女２・小児１の内容である。大腿骨でみた場合より，歯で整理した個体数のほうが多いので，この７個体を石棺内人骨の推定個体数としたい。性別についても，歯と大腿骨とで，相互に矛盾はない。

これらの人骨には直刀・鉄鏃・小刀・鉄製鎌・鉄製釣針・ガラス小玉などが伴出し，また，石棺内に赤色物（朱およびベンガラ）が使用されているという。

Ⅲ　人骨の形状

人骨は焼けていない。また外傷や病変も認められない。

(1)　頭蓋および歯

全部で7個体分あるので，便宜上これにA～Gの記号をアルファベット順に付けた。

a) 頭蓋A（写真7）

壮年期女性の頭蓋冠片・下顎骨片・歯であると思われる。頭蓋冠の矢状縫合・ラムダ縫合は内外板とも開いている。外後頭隆起がやや突出している。歯の状況を次に示す。

8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 ×
× ○ 6 5 4 3 2 1	× 2 3 4 5 6 7 8

ただし，アラビア数字は永久歯，○印は歯槽開放，×印は欠損のため状況不明であることをそれぞれあらわす（B号以下の場合もこれに準ずる）。 $\overline{8}$ は萌出途上にある。歯の咬合様式は鋏状咬合型で，咬耗度は前歯がBroca 2度，後歯が同1度である。齲蝕は見られない。

b) 頭蓋B（写真8）

壮年期後半の男性の歯だけが下記のように残っている。

8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 ×
8 7 6 5 4 × 2 ×	× 2 3 4 5 6 7 8

歯の咬合様式は鉗子状咬合型で，咬耗度はおおむねBroca 2度である。齲蝕は見られない。

c) 頭蓋C（写真8）

壮年期男性頭蓋の右側の側頭部の破片，下顎骨体片などのほか，下記の歯がある。

× 7 6 5 4 3 × ×	× × 3 4 5 6 7 8
8 7 6 5 4 × × ×	× × × 4 5 6 7 8

歯の咬耗度は前歯がBroca 2度，後歯が同1度である。齲蝕は見られない。

d) 頭蓋D（写真9）

壮年期男性の比較的頑丈な下顎骨のほぼ右3分の2があるほか，頭蓋冠の小破片などが残っている。右オトガイ孔に副孔は認められない。下顎の歯の状況は下記のとおりである。

8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 ×

8 は萌出途上にある。歯の咬耗度は前歯がBroca 2 度，後歯が同 1 度である。齲蝕は見られない。

e) 頭蓋E（写真 8 ）

壮年期女性の歯だけが下記のように残っている。

7 6 5 × 3 × ×	× × 3 × 5 6 7
7 6 5 4 × 2 1	1 2 × 4 5 6 7

歯の咬耗度は前歯がBroca 2 度，後歯が同 1 度である。齲蝕は見られない。

f) 頭蓋F（写真 8 ）

壮年期男性の上顎骨の一部などの頭蓋片のほか，下記の歯が残っている。

7 6 5 4 3 2 1	1 2 × 4 5 6 7
	6

歯の咬合様式は鋏状咬合型で，咬耗度は前歯がBroca 2 度，後歯が同 1 度である。齲蝕は見られない。

g) 頭蓋G（写真 8 ）

年齢 3 歳前後の幼児のものと思われる歯がある。まず，下記の乳歯 5 本がある（アルファベットの大文字は乳歯をあらわす）。

D C	C D
	D

この乳歯の咬耗度は軽微である。このほかに未萌出の永久歯が 5 本，下記のように認められる。いずれも歯冠だけである。

7 6 2 1	
	2

(2) 頭蓋以外の人骨

a) 上肢骨（写真10）

右側の肩甲骨の外側角付近と肩甲棘の一部，右側の鎖骨の中央部分が

ある。上腕骨・橈骨・尺骨については，長短はあるが，いずれも骨体の一部分が残っている。ほかに中手骨片が2個，指骨片が1個ある。

b) 下肢骨（写真11・12）

まず寛骨片についてみると，左側は男1・女1・性別不詳3，また右側は男2・女1の構成となっている。大腿骨の性別については，人骨の出土状況の項で記した。骨表面の保存が不良なため，計測はできないが，概してピラステルの形成は認められないのに，骨体上部は扁平性を示す傾向が認められる。脛骨・腓骨については，骨体の一部が残っているだけである。

c) そ の 他

腰椎・仙骨の破片が各1個，また短い肋骨片が数個残っている。

Ⅳ ま と め

6世紀末～7世紀初頭に属する関城町専行寺古墳の箱式石棺内から発見された人骨は壮年期の男性4体・女性2体と，年齢3歳前後の幼児1体の計7個体分である。

5. ま と め

以上簡単に専行寺古墳の調査概要を紹介して来たが，目下調査途中であり，正確な記録は関城町史の中で述べたいと思う。

専行寺古墳と私達が命名した小古墳は，全く偶然の機会に発見された。そして上野地区の皆様の物心両面に亘る暖かい援助によって発掘調査を実施することが出来た。この道を追究する一学徒として心から感謝致したい。

本古墳は鬼怒川中流域における古墳文化研究に詳細な記録を提供するばかりではなく，上野地区が中心となって末永く保存されることとなったことは，本県下の文化財保存にとって一つの新しい方向を与えたものといえるだろう。

学術的には6世紀末から7世紀初頭に位置づけられる史料と共にきわめて注目される示唆を与えてくれたようである。それはかつて私達が箱式石棺内に塗布された赤色顔料をその古墳の年代を決定する上で重視した。しかし今回必ずしもそれが正しくないことを教え研究の新たな展望を開くこととなった。それは常陸における箱式石棺内の装飾化の可能性である。7世紀の常陸には船玉古墳や虎塚古墳等が示すように，赤色，白色等の顔料を使用した横穴式石室内の装飾が存在する。しかし6世紀代のそれは確認されておらず，私達は6世紀に非常に流行した埋葬施設である箱式石棺にもそうした例が存在するのではないかと期待しているが，未だ発見されていない。

今回の専行寺古墳の赤色顔料の外に白色の漆喰状の物質が赤色とは区別されて存在した。

その物質が何であるかは現在分析依頼中である。いずれ結論を下し得ると思う。

次に本墳中特筆される点は，森本先生によって判明した人骨の調査結果である。壮年期男性4体，同女性2体，3歳前後の幼児1体の計7体の遺骸が埋葬されていたという。しかもそれらがあの小石棺内に火葬もされずに追葬されていた。

このことは当地方の古墳研究にきわめて重要な資料を提供したことを意味するのである。

直径20m弱の小円墳に7体もの遺体が追葬され，しかもその機能を箱式石棺が果している。そして遺体は直接この中に埋葬されていたようであり，前埋葬者

上か，白骨化した遺体上に追葬が行われている事実である。

箱式石棺出土の人骨についての専門的な調査は従来あまり行れておらず，今回の調査において詳細なデータが得られたことは，今後の研究にとって大きく貢献するものと思われる。

最後にもう一度私達に調査の機会を与えて下さった関城町並びに上野地区の関係者に心から感謝して本報告書を結びたい。　　（茂木　雅博）

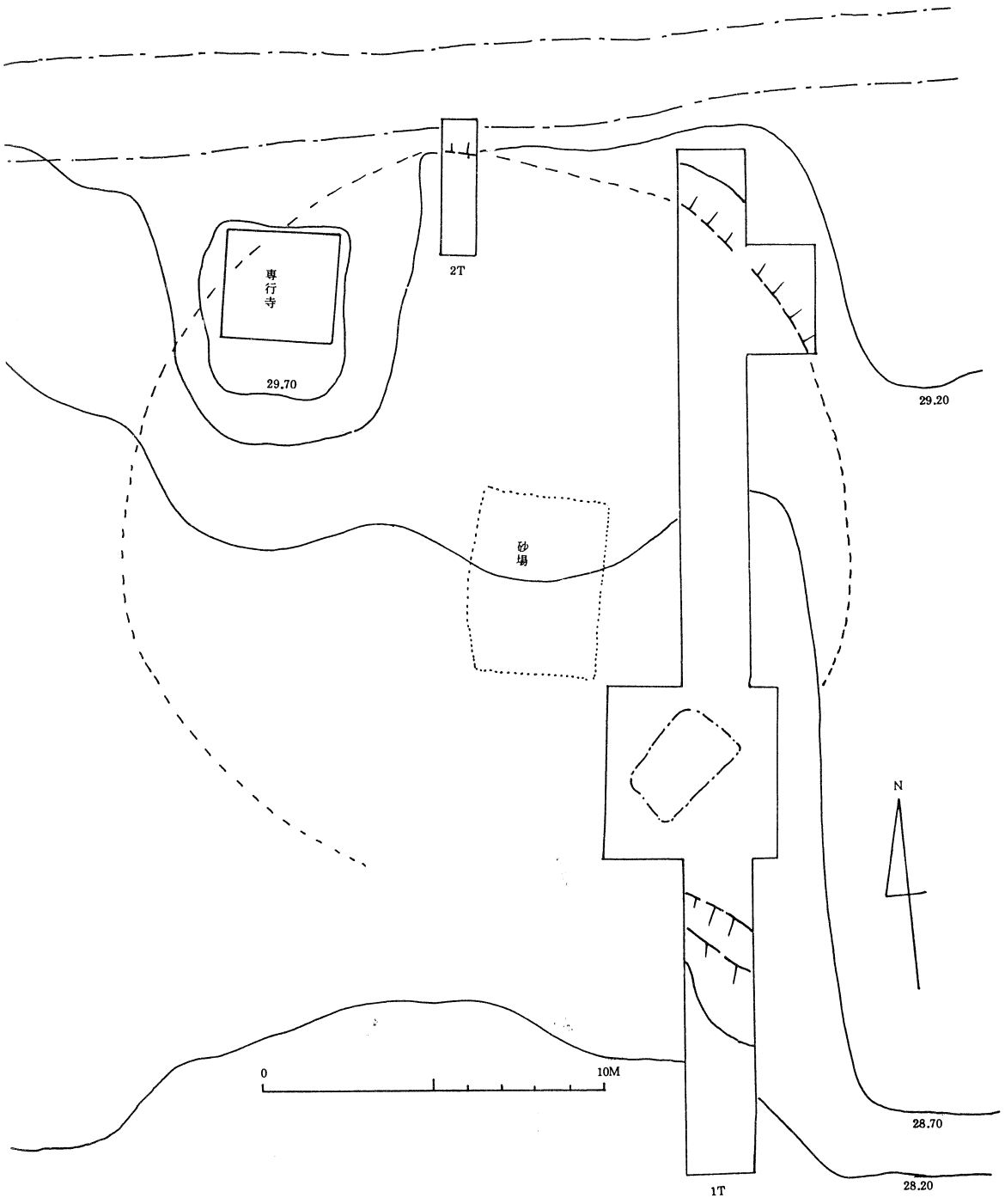
調査参加者

築　建司　新井　薫　柴山美智江　栗原　政彦　松本　幸雄
坂入　正夫　（関城町関係）

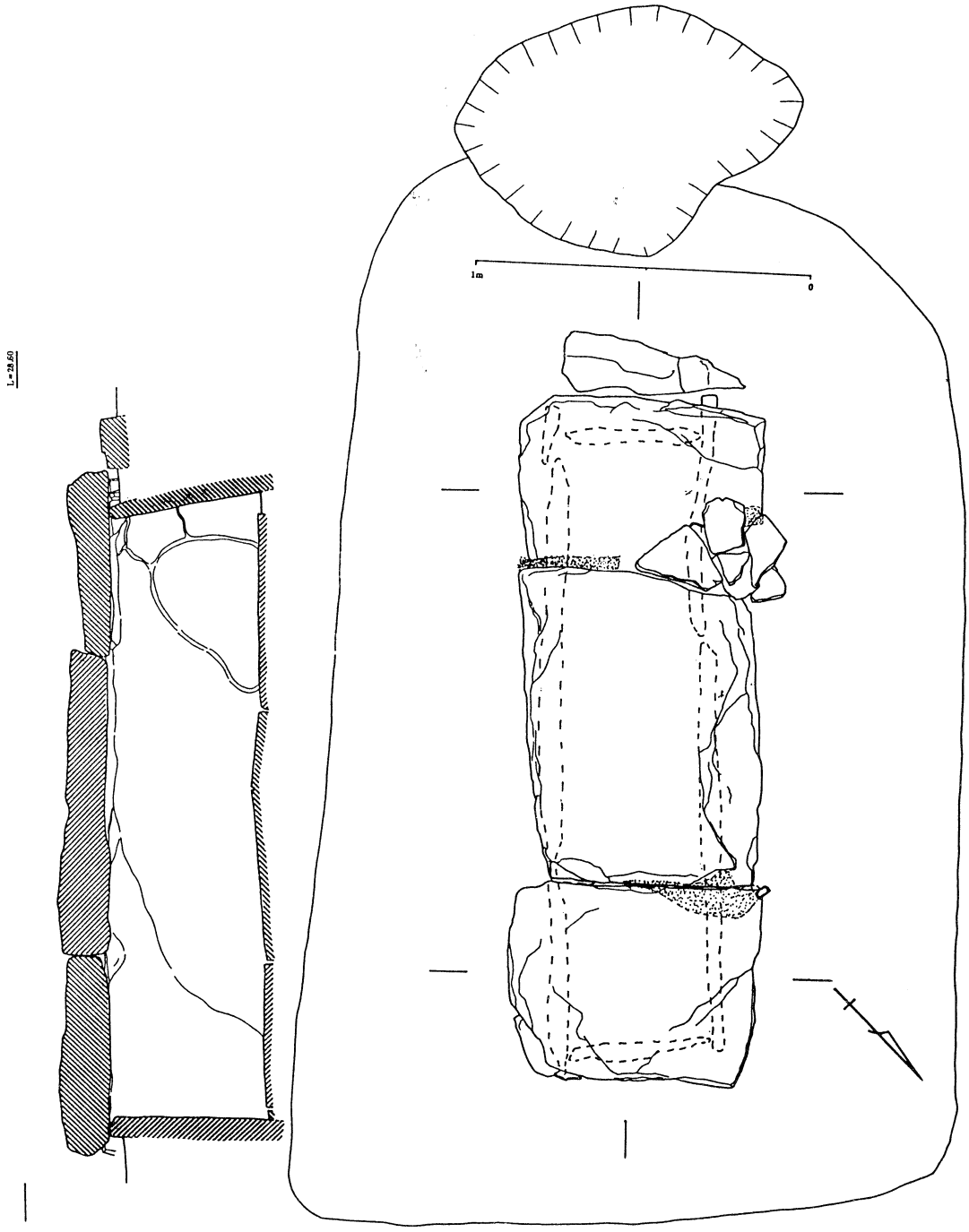
関　四郎　栗原　清　小林　武夫　栗原　茂一　八角　一男
（上野地区関係）

茂木　雅博　塩谷　修　奈良　裕基　谷口　一弘　森　敦子
荒木　敦史　生田目和利　松浦　隆　伊藤　高史　菊地　昌宏
斉藤ゆかり　佐野　香織　細井里江子　源川　幸秀　（茨城大学関係）

附　図

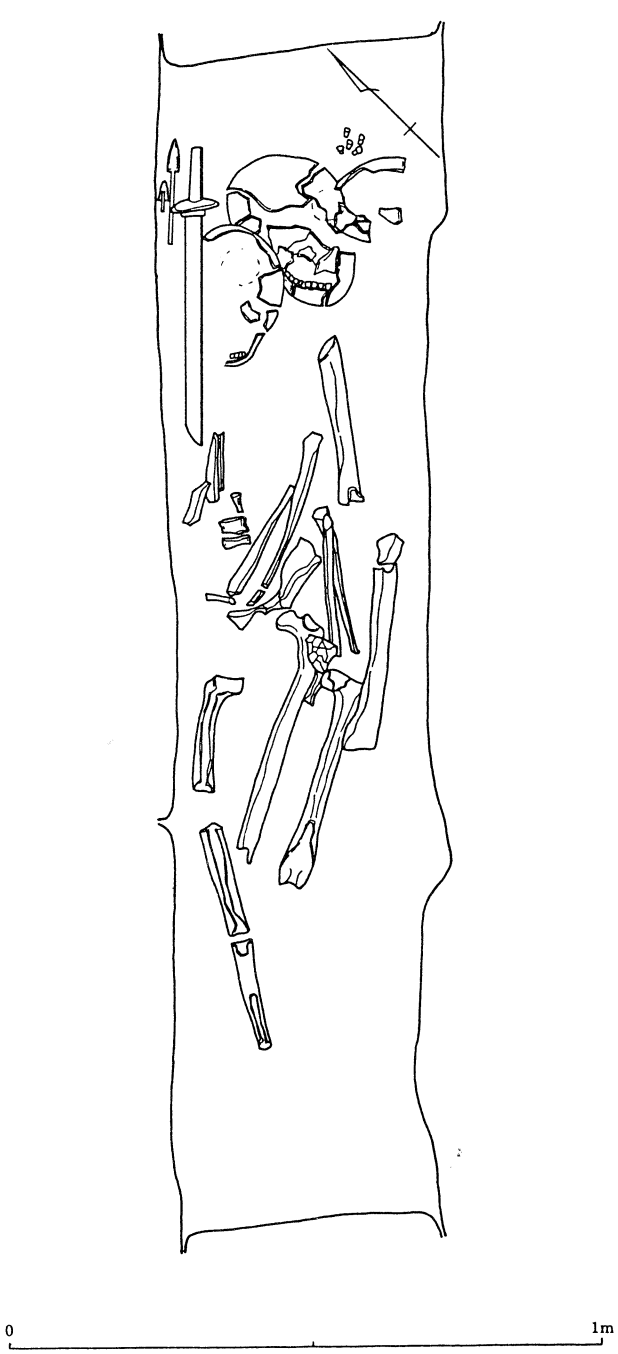


第１図　専行寺古墳実測図



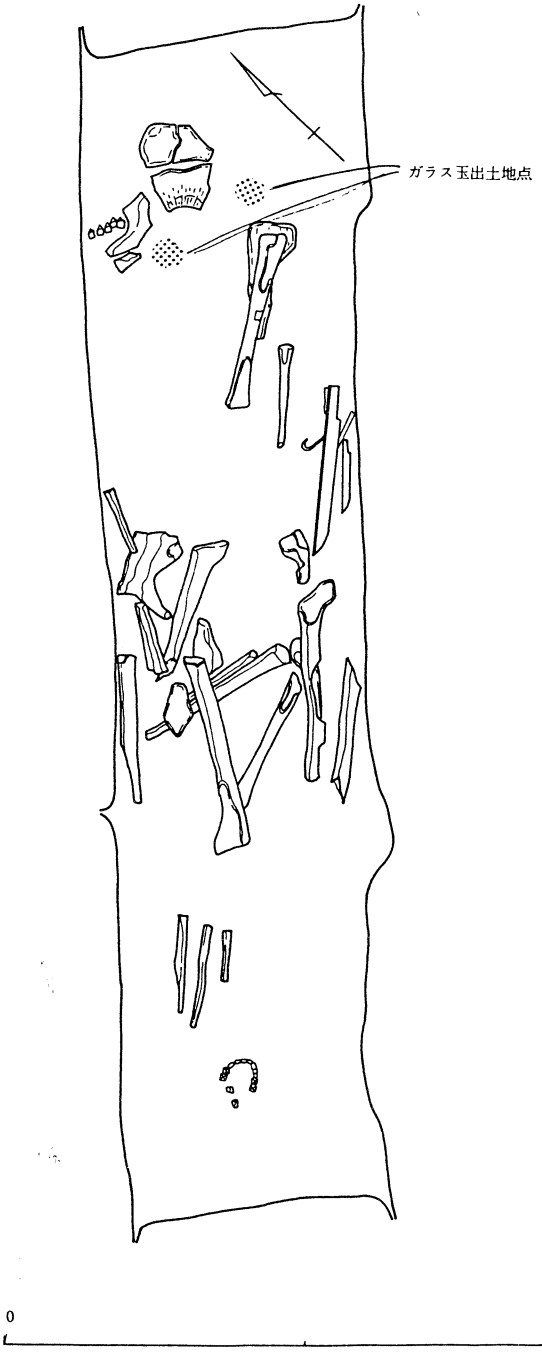
第２図　箱式石棺蓋石実測図

第３図　箱式石棺内遺骸出土状況



0　　1m

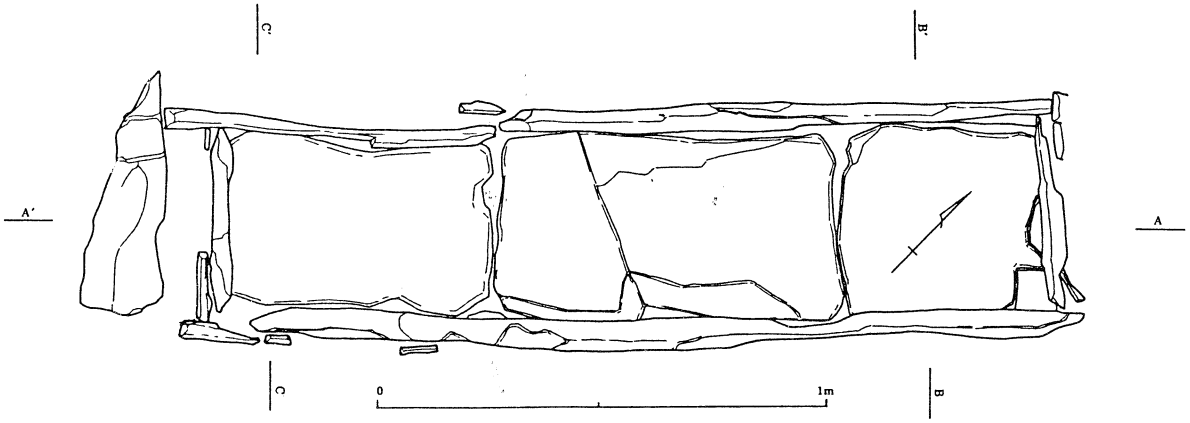
(1)　石棺内遺骸上面実測図



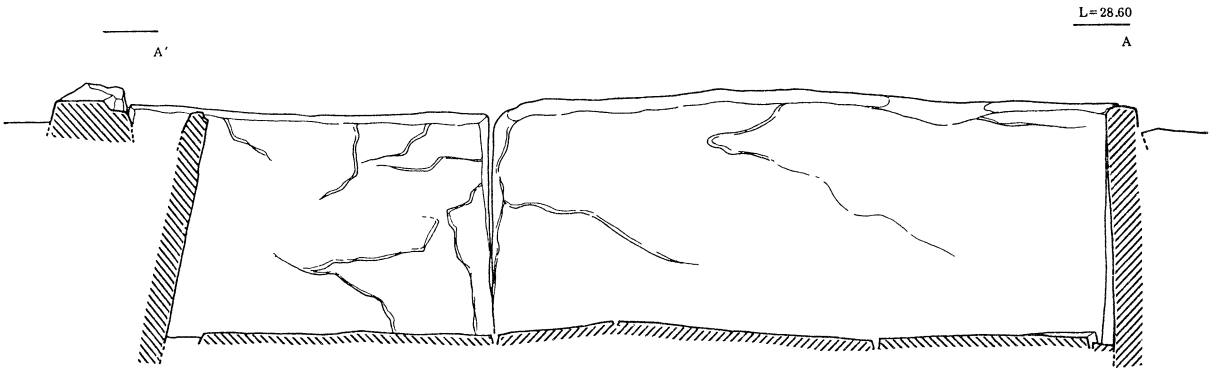
0　　1m

(2)　石棺内遺骸下面実測図

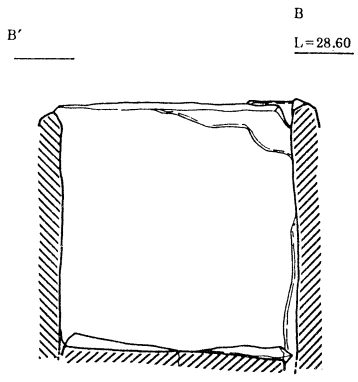
第４図　箱式石棺実測図



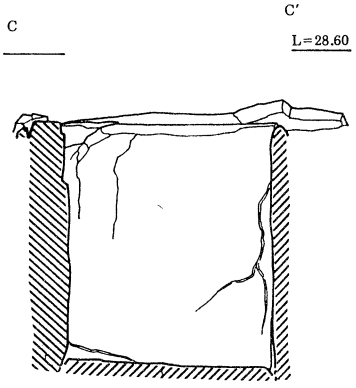
(1)　箱式石棺実測図



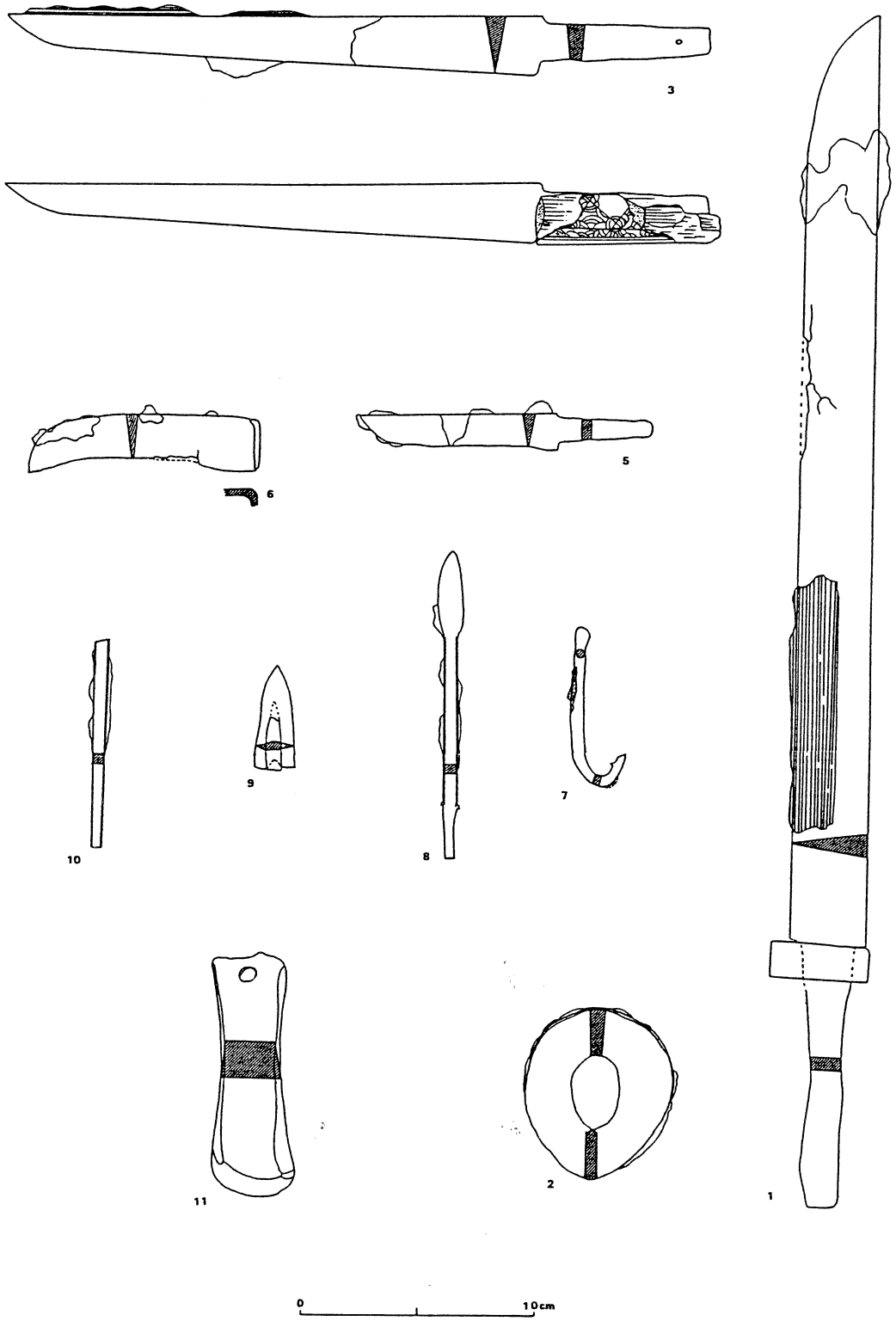
(2)　北　壁　実　測　図



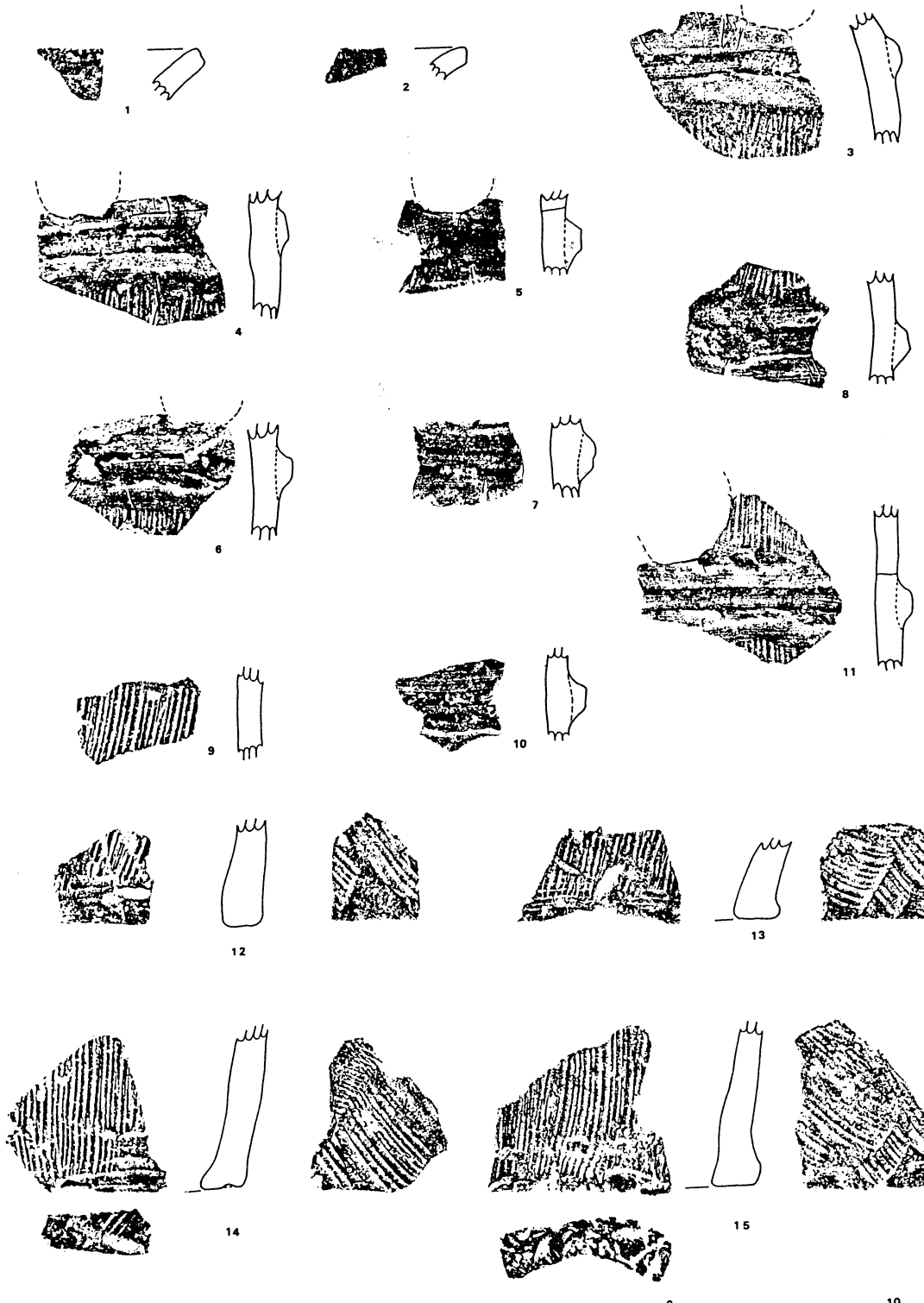
(3)　東壁実測図



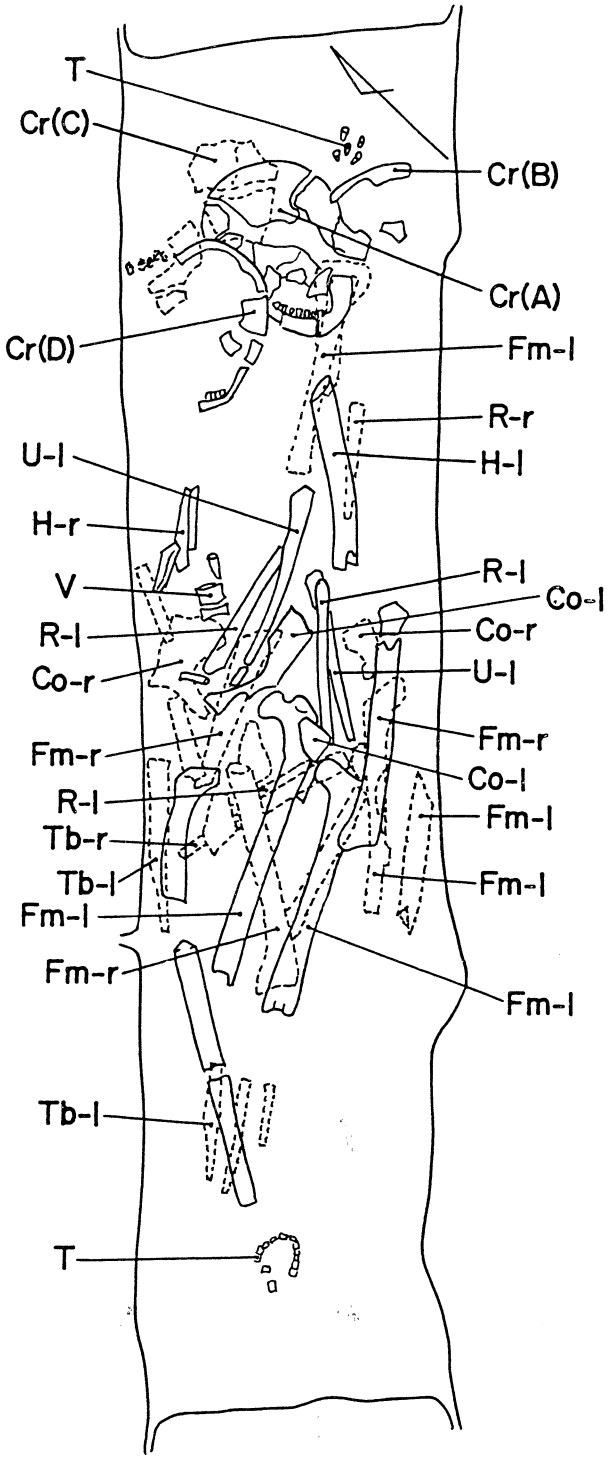
(4)　西壁実測図



第5図　副葬品実測図



第6図　出土埴輪拓影



第7図　箱式石棺内における人骨の出土状況。Crは頭蓋，Coは寛骨，Fmは大腿骨，Hは上腕骨，Rは橈骨，Tは歯，Tbは脛骨，Uは尺骨，Vは椎骨，またハイフンの次の l は左側，r は右側をそれぞれ示す。

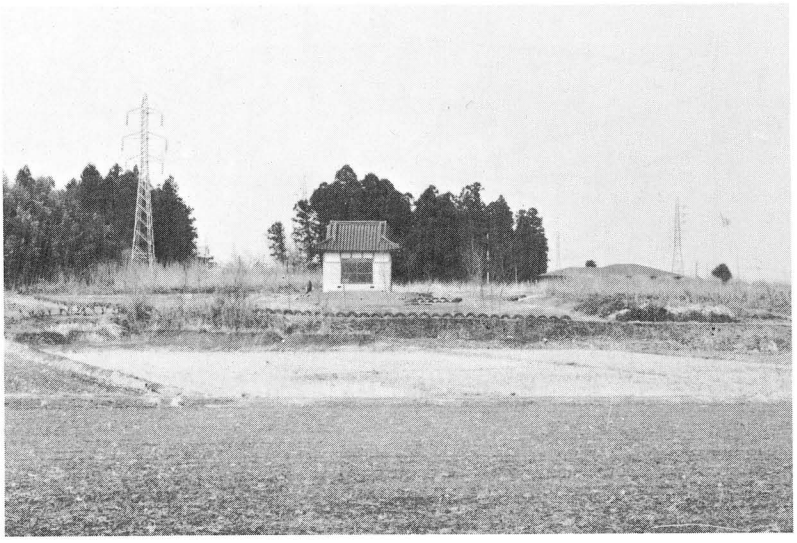


写真1
古墳のあった専行寺跡を南方より撮影
墳丘は削平されその面影はない。

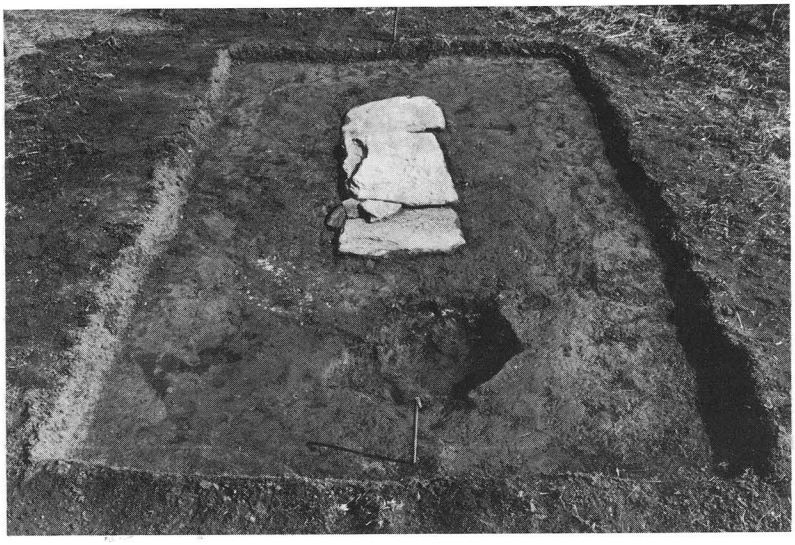


写真2
僅かに板石が露出していた箱式石棺
手前の穴は数年前植樹した桜の木を作業のために抜いた跡

写真3
石棺の蓋石をあけたところであるが，内部は草木の根が張りめぐり，土砂がかなり流れ込んでいた。

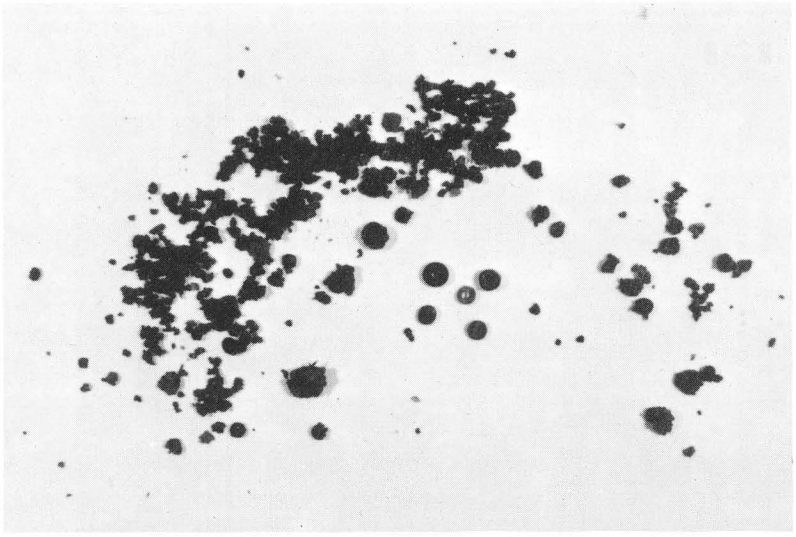


写真４
副葬品
　ガラス小玉

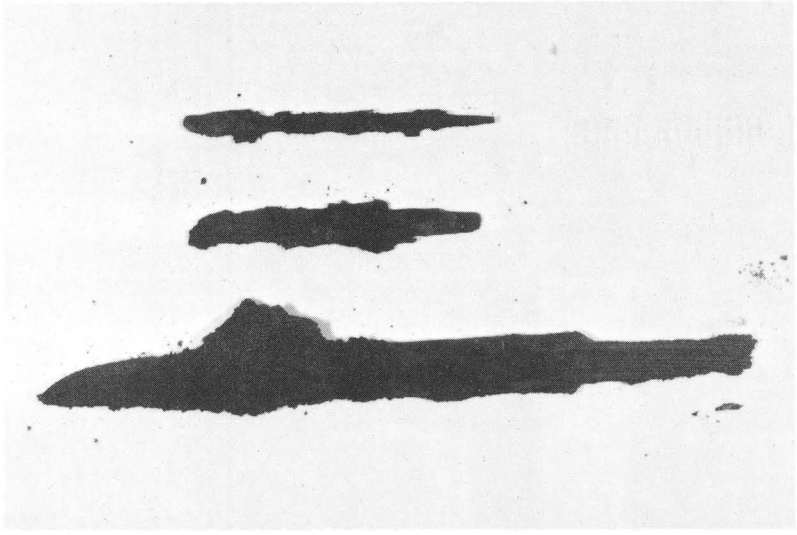


写真５
副葬品
　上から鉄鏃・
　刀子・短刀

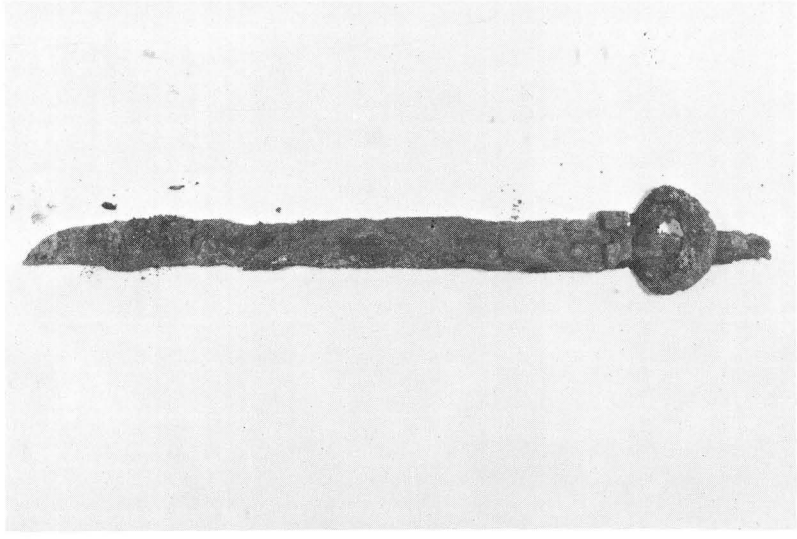


写真６
副葬品
　直　　刀

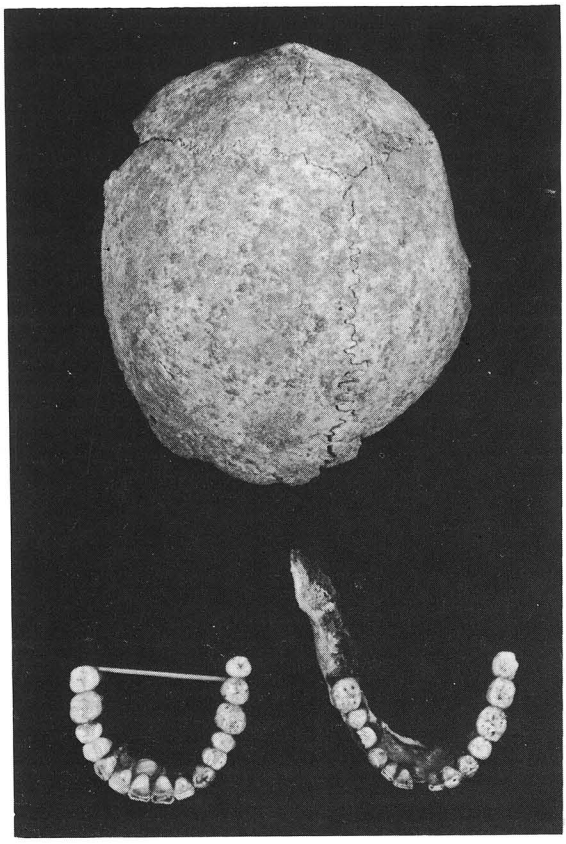


写真７　頭蓋Ａ

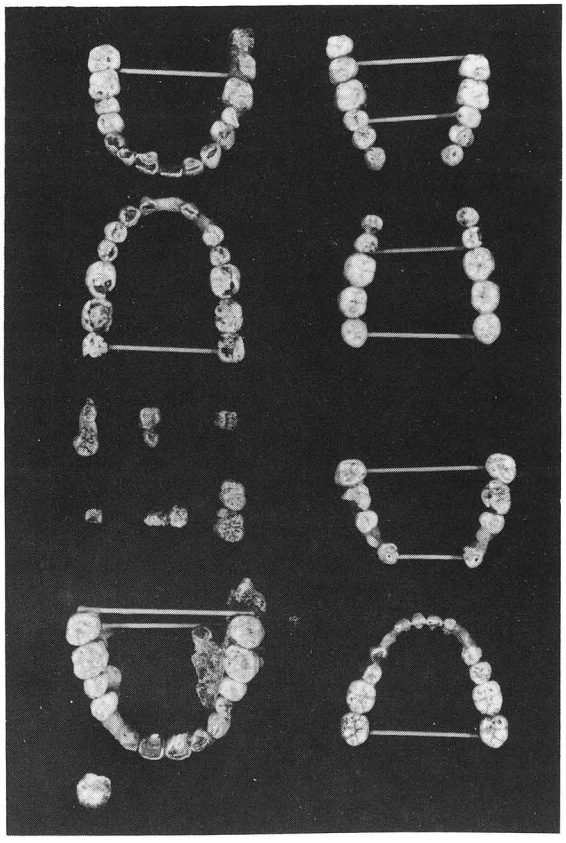


写真８　左列上から頭蓋Ｂ，頭蓋Ｇ，頭蓋Ｆ，
また右列上から頭蓋Ｃ，頭蓋Ｅの順

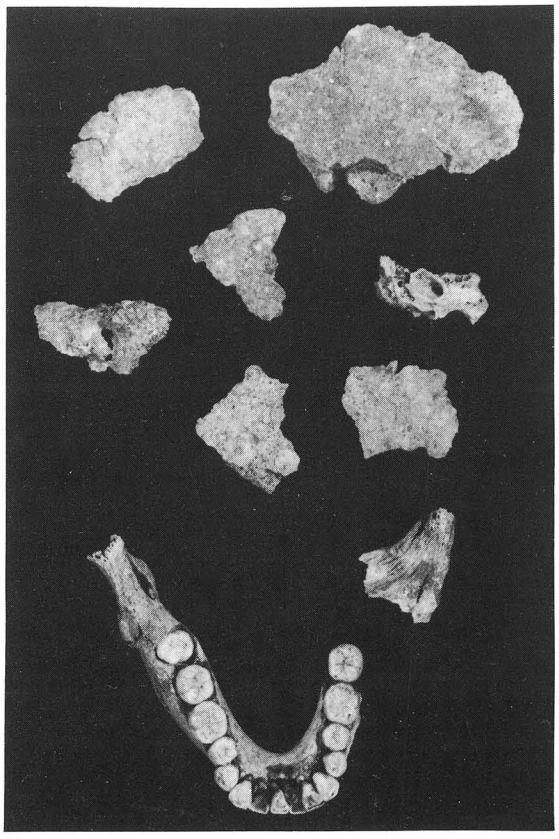


写真 9　頭蓋D

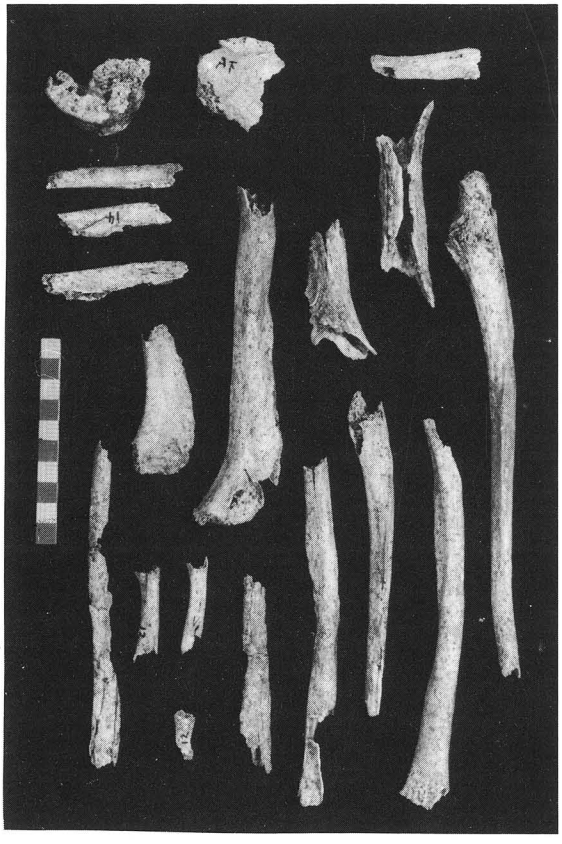


写真10　上肢骨片

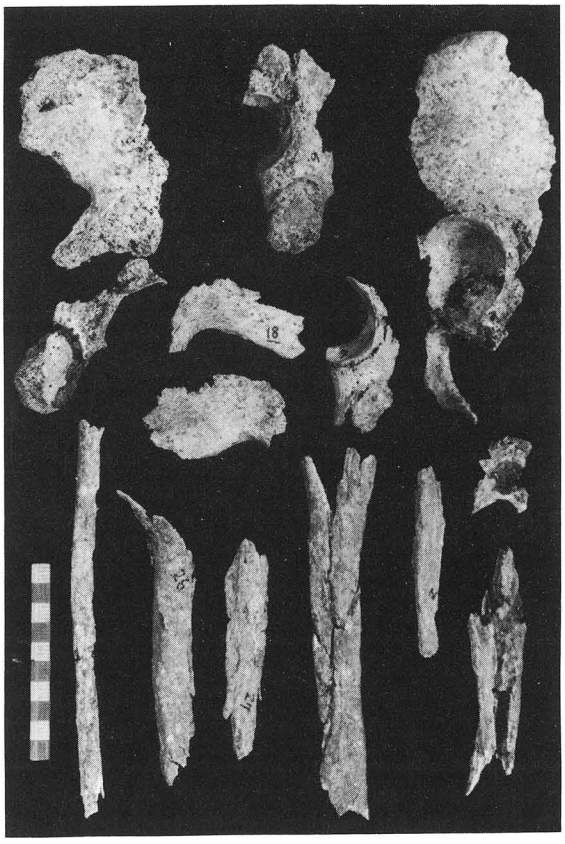


写真11　下肢骨片（大腿骨を除く）

写真12　大腿骨片

関城町専行寺古墳発掘調査報告書
1986年2月28日
編集・発行　関城町教育委員会
関城町史編さん委員会
印　　刷　㈲昭栄堂印刷